

# 太陽黒点

敗戦とは何だったのか。人によって、世代によってとらえ方は違うだろう。今回紹介する作品の舞台は昭和三十年代の東京。太平洋戦争の影響がまだ色濃く残っている。「戦後」を生きる人々にとっての敗戦の意味。それがこの作品のテーマとなる。

才気あふれる美貌の青年、<sup>かぶらぎあきら</sup> 鏑木明は貧苦にあえぎながらも大学に通い、献身的な恋人、土岐容子とともに平凡ではあるが幸福な生活を送っている。しかし、貧しさにも苦勞にも無縁な金持ちの同級生たちに対して、嫉妬からくる言いようのない憎しみを覚えていた。そして、戦争を支持することで日本全体の貧困を生み出したにもかかわらず、罪悪感を抱かずに生きる「戦中派」の大人たちに耐えがたい苛立ちを感じていた。

そんなある日、明はアルバイトの最中に社長令嬢、多賀恵美子と出会う。恵美子が自分に好意を寄せていることに気付いた明は、彼女との恋を足掛かりにして裕福な階級にのし上がり、自身が憎む金持ちたちに「罰」を与えることを企てる。恋人も平凡な生活も犠牲にして。

恵美子に近づくために、金持ちたちとの付き合いを始めた明は次第にぜいたくな生活に溺れ、墮落していく。容子は墮落していく明に絶望感を覚えながら、それでも献身的に尽くす。彼らの生活は次第に悲劇的な色を帯び、やがて予想もできない終局を迎える。

この物語の魅力は、「戦後」の生々しい描写である。戦争によって失われた自らの青春を嘆くばかりの「戦中派」、敗戦のことなど忘れたように戦後の好景気に狂喜する成金たち、そして、大人たちが引き起こした戦争によって貧しさを押し付けられた若者。混沌とした「戦後」という時代に飲み込まれていく主人公たちの悲哀に胸を打たれない者はいないだろう。

持つ者と持たざる者、恵まれた人と恵まれぬ人。「戦後派」の若者が抱える問題は現代にも通じるものだ。今を生きる我々も、作中の「戦後」から得られる何かがきっとある。



## 『太陽黒点』

著者：山田風太郎  
出版：KADOKAWA  
定価：629円（税抜）